

第3表 エンドリン乳剤の撒布時期と被害との関係

撒布時期	発蛾最盛期後日数	白穂株率	分散防止率
8月 11日	15日	2.9%	76.0
8月 22日	26	4.1	66.1
8月 31日	35	8.5	29.8
標準無撒布	—	12.1	—

効限界と思われる。なおこれと併行し県下の発生予察観察所の援助で分散時期を調査した結果は、草型とか落水との関係は明瞭でなかつたが、分散初期は発蛾最盛期後早生で10日、中晩生で15日目で以後30日目までの間に急分散することが分つた。

1956年には水稻金南風（晩生）を用い1区10坪3連制で慣行のエチールホリドール乳剤の2回あるいは1

回散布区に対し EPN 粉剤の散布時期を検討した。これは第4表に示す通りで1回撒布では効果が不確実であるが、発蛾最盛期と16日目の2回あるいは16日目、26日目の2回撒布は、発蛾最盛期ころの2回撒布と相互間に差なく、ともに有効であつた。また別にエンドリン乳剤 692倍反当8斗撒布の結果もこの試験の場合と同様傾向であつた。

以上兩年の試験結果を要約すると、2化期移転分散防止に有効で人畜や魚類に毒性の少い農薬としては、ネオシストロン、シストロン、EPN乳剤、EPN粉剤がよく、散布時期は発蛾最盛期とその15日後、または15~25日後の2回撒布がホリドール乳粉剤を最盛期ころ2回撒布するのと同様効果が期待されるようである。

第4表 EPN粉剤の撒布時期と被害との関係 (1956)

薬 剤 名	発蛾最盛期後日数	白穂数	白穂株率	分散防止率	反当収量	同 比
慣エチールホリドール粉剤 1.5%	0+8	20.0 **	3.5 **	68.2	2.94	103.7
慣 "	6	59.7	10.5	4.5	2.91	102.7
EPN粉剤 1.5%	0	39.0 **	7.2	34.5	2.97	104.8
"	0+16	6.3 **	1.4 **	87.3	2.92	103.1
"	16	43.3 *	8.5	22.7	2.95	104.1
"	16+26	19.7 **	4.2 **	61.8	2.89	102.0
白穂 技 取	16	23.7 **	6.8	38.2	2.97	104.8
標準無撒布	—	66.3	11.0	0	2.83	100.0

## ニカメイチュウとイモチ病の同時防除試験

友永 富・倉矢 寛・今村和夫

(福井県農事試験場)

1化期末7月24日のニカメイチュウによる被害は少なかつたが、セレスアン水和剤に殺虫剤加用のものはパラチオン単用と同等効果があり、2化期白穂率検定結果では1%水準での有意差を見、セレスアン水和剤にシストロン、パラチオン乳剤、EPN乳剤をそれぞれ加用はパラチオン乳剤単用と同様有効であつたがリンサク乳剤はやや劣つた。ハイモチ病は少発で傾向がはつきりしなかつたが、クビイモチは1%水準で有意差をみた。また被害茎数も1%水準の有意差があつた。この結果からセレスアン水和剤単用と、セレスアン水和剤にシストロン、ベストロン、パラチオン乳剤、EPN乳剤

を加えたもの、リンサク乳剤は同等の防除効果があつた。葉害は何れもみとめられなかつた。収量に於ては統計的有意差はなかつたが薬剤区は何れも増収した。

次に、粉剤についてはセレスアン石灰に BHC、ホリドール、EPN、ダイアジノンの各原末混入のものは BHC粉剤3%、ホリドール粉単用と遜色がなかつた。ハイモチ病については発生が極めて少なかつたので充分な比較資料を得ることができず、結局、各薬剤区間に有意な差をみとめることはできなかつた。葉害については問題で、ごくわずかではあつたが、ともかく、変徴が認められた。